



TITLE:

米洲行日誌(4)

AUTHOR(S):

山本, 一清

---

CITATION:

山本, 一清. 米洲行日誌(4). 天界 1937, 17(197): 411-415

ISSUE DATE:

1937-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167534>

RIGHT:

## 米 洲 行 日 誌 (4)

山 本 一 清

5月1日(土曜日)

(カヤオ港に上  
陸の山本博士)

朝早くから船は左舷に大島小島を多く迎え、又、ベリカン鳥や鱸の群を見つゝ進んで、11時にパナマ運河の南東岸にあるバルボア港に着いた。サンタ・ロ1ザ其の他2、3の船も着いてゐる。碇泊が半日以上もあるので、山本邦之助氏を迎えに來られた天野商店の山下、松田兩氏の厚意により、同船の大申氏と共にパナマ市内外のドライブをした。晝食はアトラスで頂き、それから運河見物に出かけたが、ミラフロレス水門からベドロ・ミ

ゲル水門まで往つて始めて Clio といふ船が通峽してゐる有様を見た。暑かつたけれど、良い見學であつた。

16時、船へ歸つて、會々來訪せられた當地の海本領事に會ひ、福島、小池兩夫妻と一同喫烟室で暫く話した。福島氏からペル1発行の新聞の切りぬきを頂いたが、ペル1の官權は日食觀測地として、霧を避けたチンボテ附近の山上を二つ三つ推舉してゐられるが、自分はやはり太陽の高度を心配するため、トルヒ1ヨ附近に定めたいと思ふ。午後には霧の心配は無い見込みである。

船は20時に出帆した。空が極めて良く晴れてゐるので、他の船客と共にそろくまで星を見る。——船室が満員になつたので、今夜から自分は又6號室に眠る。

5月2日(日曜日) 晴れ。正午の船の位置、西經  $78^{\circ}27'$ 、北緯  $6^{\circ}28'$ 。バルボア港より164哩、ベナペントウラ港へ196哩。氣壓757.2托、氣溫  $29^{\circ}$ 、水溫  $27^{\circ}\text{C}$ 、無風。

朝7時半から1等サロンでカトリク式のミサがあつた。

空が良く晴れてゐるので、夕食後カノ1ブス星の左下に大マゼラン雲を捜したが、惜しくも低い雲のために見えない。しかし、センタウル座や南十字

座はスバラしいし、黄道光も見事である。

**5月3日(月曜日)**

朝から楊子江口のやうな廣い河口を遡るやうな所を 船は進んで、9時半に  
ブエナベントウラといふ港の岸壁に着いた。二つ三つ、ホテルらしい大きい  
建築物があるけれど、大した都市でもなさそうな所である。自分は上陸もせ  
ず、船の甲板から四方の景を眺めたのみ。附近は一帯に平地で、只、遠くに  
は可なり高い山脈が見える。マンザニヨ港から2等に乗りに込んでゐた旅役者  
の一群が約50個のトランクを持つて下船した。

船は13時に出帆。客が減じたので、自分は今夜から又11號室に眠る。今夜  
も小1時間西南の低空に大マゼラン雲を捜したが、駄目であつた。

**5月4日(火曜日)** 曇り雨模様。正午の船の位置、西經80°07′、北緯1°04′。ベナベント  
ウラ港より254浬、パイタ港へ391浬。氣壓758.7耗、氣温25°、水温 25°C、風 W。

2、3夜餘り寒い風に當つたためか、昨夕から頭痛がし、今朝は少し熱もあ  
るらしいので、終日11號室内に臥床してゐた。日本より柴田夫人男兒安産の  
報あり、早速ノルエ1丸に轉電する。又、リマの池山氏より電報あり、やは  
りチンボテ附近の山上を推薦してゐる。こちらからはリマの帝國領事館へ、  
サラベリ港に上陸する許可の手續きを依頼する電報を發した。——今夕18時、  
赤道を通過した。

**5月5日(水曜日)** 晴れ。正午の船の位置、西經81°16′、南緯3°20′。昨日より航走278浬。  
ベナベントウラ港より532浬、パイタ港へ118浬。氣壓758.2耗、氣温22°、水温 20°C、風  
SSW。

赤道を越えたばかりではあるが、溫度は下降して、今朝は外套を着た人さ  
へあつた。しかし之れでも尚ほ暖かい方だと機關長の言。自分も毛のシャツ  
を着る。風邪は全快した。

午前中から6號室で荷物の整理と分類をする。午後は15時半から後甲板上  
で船長招待のお茶の會があつた。左舷にはペル1北部のタラ1ラ町あたりの  
石油タンクが夥しく見える。

ノルエ1丸より、“カヤオ着は豫定よりも約10日おくれる”との報あり、  
驚いたが、しかし致し方なく成り行きに委せる。

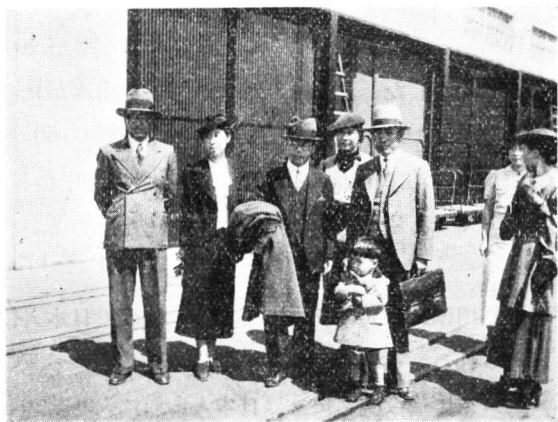
夕食後、18時20分日没。但し緑閃光は認めない！ 19時半、大マゼラン雲

を見た。1925年以來12年ぶりである。

21時半、船はパイタに着いた。之れがペル1の最初の港である。入港と同時に自分はリマの公使館からと、岸氏からと2通の電報を受け取つた。是非カヤオまで直航せよとの趣意である。

#### 5月6日(木曜日)

昨夜投錨したパイタ港は、今朝起きて眺めると、一木一草もない丘を背景とした淋しい町である。しかし、書物で讀んだことのある通り、天氣は快晴無風で、天體觀測には絶好の土地柄たることが明かである。こゝで始めて港内のパノラマを活動寫眞に撮影した。船は朝から荷役で午後終了、17時出



(カヤオ港に上陸)

帆した。入り代り米國グレース社貨物船“Cusco”が入港して來た。日没は昨日と同じ18時20分。今日も綠閃光が認めず。只、赤い太陽のまゝで水平線に沒した。

夜、南天極めて清澄で、諸星座もマゼ

ラン雲もよく見える。今夜は特に龍骨座の星附近の有名な星野を詳細に觀察した。

#### 5月7日(金曜日)

朝7時、ピメンテル着。陸から1000米ほどの點に投錨。かなり強い風があるし、波も珍らしく高いので荷役は苦勞らしい。氣候も寒いので、自分は今日から冬服に着換へる。午前中“Mantaro”といふペル1國の優秀客船が入港した。舊式の船である。數日來リマ方面からの通信を考慮し、やはり自分はサラベリ港上陸を取り止め、此のまゝカヤオ港へ直航することに決定。公使館に電報した。

14時半、拔錨。15時、自分は船橋によつて船長や運轉士たちと天氣のことなど意見を交換した。18時12分、日没。美しくはあつたが、緑閃光は認められない。

19時、パカスマヨ入港。圖らずもリマの帝國公使館の細川通譯官と、トルヒヨ市の帝國名譽領事ラルコ・エレラ氏と、パカスマヨの日本人代表數名が歓迎のため上船して來られたので、觀測地の選定やら、其の他のことについて打ち合はせした。細川氏は此の船でカヤオ迄、又、ラルコ氏はサラベリ港まで乗つて下さる。之れでベルの公私人と直接の連絡が取れるやうになつたわけである。

#### 5月8日(土曜日)

午前中、ラルコ氏や細川氏、福島氏等と觀測上のこと及び今日サラベリに上陸後のプログラム等について相談した。左舷にトルヒヨ附近の山々が見える。ほど豫想の如く、正午に近い頃に船はサラベリ港に入り、棧橋から500米ばかりの所に投錨した。風波が強い。驚いたことに、此の邊一帯に海岸から、かなり高い山腹まで白い砂々々々である。全く沙漠で雨が降らないことがわかる。

投錨後、まもなくラルコ、細川兩氏と共にランチで上陸。棧橋で日本人代表者及び小學生徒一團に迎えられる。それから自動車に分乗し、サラベリの町を通りぬけ、13時、トルヒヨ市に着。直ちにまづ日本人會館に入り、20名ばかりの代表者のレセプションあり、自分はトルヒヨ市が今回の日食觀測上に重要な意味を簡単に述べた。次でカテドラル廣場に近い日本名譽領事館即ちラルコ氏邸に入り、市長、軍團長、其の他の有力者約20名と共に午餐會が開かれた。

15時半から一同、市の郊外にある水源地附近の地勢を見に出かけた。しかし今日は特に風が強いので、充分な視察は他日にゆづることとし、再びラルコ氏邸に歸り、新聞記者に會見した後、18時、多くの人々に見送れつゝ船に歸つた。何だか少々疲れたような氣がする。船はまもなく出帆。

#### 5月9日(日曜日)

朝、船はワチヨ港に寄つた。約半日の餘裕があるといふので、細川氏に誘

はれて小池夫妻と共に上陸し、先づ當地の丹治氏を訪ひ、それから共に市内市外や、附近の綿花耕地をドライブした。ところが途中で、リマから自分を出迎へに當地へ来て下さつた中央日本人會長黒飛氏に會ひ、皆打ち揃つて夕刻に船へ歸つて來たら、船には又、リマから出迎へとして岸、池山、伊集3氏も居られたので、厚意を感謝した。此等の4氏は此のまゝ船に乗り込み、明日カヤオ港まで同行して下さる。船は18時出帆。

船は超満員で大賑ひ、晚餐の席も賑やかであつたが、其の後5、6人で船のブリヂのまだその屋上に登りつめ、冷風に當りながら、晴れた星々を指しつゝ話し込んだ。細川通譯官が、意外にも天文學の造詣が深いので、“いつの



(カヤオ市日本人小學校生徒の出迎へ)

まに勉強されたものか!”と皆々驚く。

#### 表 紙 寫 眞 説 明

リマは美しい南國の都である。此處はサンマルチン廣場と言つて、市の中央にある公園だ。中央に見える電車は港へ行く郊外電車で、向つて右角の3階建の建築物はホテル・ポリパルである。